

「幸せ」の本質

胆振西部医師会
守谷内科医院

なかの たつみ
仲野 龍己

2022年12月、母の一周忌の法要を札幌市郊外の禅寺で行った。現在納骨堂の仏壇では、父、母、兄の三体の遺骨が北海道で2度目の冬を迎えている。

前年12月の母の葬儀は郷里の大分県臼杵市で行われた。幸いにも新型コロナウイルス感染症第6波の直前であったため、札幌、東京、名古屋などから約20人の親戚が集まってくれた。葬儀の夜の宴会は大いに盛り上がり、にぎやかな場所の好きだった母の魂を喜ばせることができた。

これに先立つ2020年4月、私たちは父と兄の遺骨を札幌の墓に移葬する「墓じまい」を予定していたが、コロナ禍で延期を余儀なくされていたため、今回葬儀の翌日に急遽行うことになった。

当日、私、妻、長男と妹夫婦で父と兄の骨壺を取り出し、開けてみると父の骨は水分を含んではいたが30年前の火葬時とほぼ同様に保たれていた。兄は一歳前に病気で亡くなったが、小麦粉のような骨が小さな骨壺の中に残っており、その中に径1.5cm程度の小石が置かれていた。きっと母が一歳前に夭折しなければならなかった兄を不憫に思い、彼岸での遊び道具として一緒に入れたものであろうと推測した。閉眼供養の最後に、僧は九州から北海道へ引越す三体の遺骨の旅の安全と北海道での安寧を願ってくれた。

儀式の後、私たちは母の遺骨を加えた3個の骨壺を抱いて海岸に降り、かつて毎日眺めていた漁村と湾の風景を目に焼き付けた。湾の先は豊後水道で、そこを船員だった父は往来していた。父はこの村に生まれ、この海で生活し、ここで亡くなった。私は岩場に降り、父の骨壺から一握りの骨を取り出し、透明度の高い海に密かに散骨した（自治体によっては届出が必要）。翌日3個の骨壺を札幌へ郵送した。

母もこの村に生まれ、戦争中は父母と満州に渡り、戦後は引揚者として村に戻り父と結婚したが、船乗りの父の収入は不安定であったため、自分も働いて私と妹を育てた。その後、後縦靭帯骨化症を患い20年以上車椅子の生活を送り、5年前から施設に入居していた。毎週面会に行っていた妹に「兄ちゃん(筆者のこと)が就職してからはおかげで食うに困らない生活をする事ができて、本当に幸せだ」と度々話したという。快活な性格の母であったが、思うようにならないことの多かった人生だったと思う。その中から「幸せとは食うに困らない生活ができることである」という、わかりやすく慎ましい哲学を私達に遺してくれた。

医療介助死（安楽死）

岩見沢市医師会
北海道中央労災病院

みやもと けんじ
宮本 顕二

昨年11月にトロント（カナダ）で開催された尊厳死協会世界連合総会に家内の鞆持ちとして参加してきました。安楽死が合法化された開催国カナダを中心に安楽死の現状が報告されていました。まとめると、1) ヨーロッパ、北米、豪州、ニュージーランドなど安楽死を合法化する国が近年増加している、2) 安楽死の対象が広がっている、の2点です。以前は、死期が差し迫って、耐えがたい苦痛がある癌患者、遺伝性筋疾患、神経難病患者が安楽死の対象でしたが、最近は、認知症や精神疾患、さらに90歳以上は基礎疾患なしでも安楽死が可能になってきています（国によって違います）。

さて、認知症患者に安楽死を認めている国では、安楽死を実施するときには本人の意思確認が必要です。しかし、進行した認知症患者は意思確認ができないため、本人は高度に進行した認知症になったら安楽死したいにもかかわらず、意思確認ができる早期の認知症でないと安楽死ができないという問題があります。そこで、オランダでは進行した認知症で意思確認ができなくても、過去の同意書と委員会による承認があれば、安楽死ができるようになりました。カナダでは今議論の最中で今年の夏には結論が出るとのこと。また、ロンドンから来た医師は、自身の著書“O, LET ME NOT GET ALZHEIMER'S SWEET HEAVEN (2019年)”のなかで、認知症と診断された時はスイスに行って安楽死することも選択肢の一つ、と明記していました（イギリスでは安楽死は非合法）。

また、最近では安楽死（Euthanasia）という言葉避け、Medical Assistance in Dying（医療介助による死）やAssisted Dying（介助死）などを使う傾向とのこと。カナダでは医師だけでなく、nurse practitioner（診療看護師）も安楽死を実施できるので、Physician's Assistance とは言わず、Medical Assistanceになったとのこと。

今回、多くの方から声をかけられました。あるカナダ人医師からは日本の映画「檜山節考」について感想を聞かれました。また、別の医師から、三島由紀夫の切腹自殺に関連して、日本で自殺は罪になるのか、と質問されました。

トロントから帰国の機内で「PLAN75」という映画を見ました。75歳から安楽死が選択できるようになった近未来の日本で、倍賞千恵子演じる安楽死を選んだ身寄りの無い78歳主人公の心の葛藤を描写していました。将来必ず訪れる自分自身の死に際して、医療介助死（安楽死）という選択肢もありかな（実際するかどうかは別として）、と考えた次第です。皆さんはどう考えますか。